
その日、たまたま.....

遙風 霸鶴渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その日、たまたま……

【Zマーク】

Z0134F

【作者名】

遙風 翁鶴渡

【あらすじ】

杉下和也と綾子は新婚生活を満喫していた。しかし、ある日……和也が少し気を抜いてしまったがために……。

(前書き)

ホラーと言つには微妙ですが；

姿見の前で、身なりを整える。ゆっくりしている暇は無い。忙しなく時を刻む左手首の時計に手を遣りながら、顔をしかめる。

六時十五分……普段ならまだやつくりしていくても良い時間だ。

得意先を接待するはずだった奴が、熱なんか出しきえしなければ。

「へやお、佐藤の野郎……」

お陰で、じつにしわ寄せが来た。佐藤の代わりをするよう、連絡が入ったのだ。

ふうっと息をつき、鞄の中身を確かめる。書類、ハンカチ、財布諸々……そしてそして薬指。

真新しい銀の輝きに、にんまり目を細めると、一階の寝室に眠る綾子に「言つてきます」と告げた。もちろん彼女に聞こえる訳はない。彼女は、まだ夢の中を漂つているのだから。

「ちきしょつ、佐藤の奴。俺は睡眠不足なんだぜ?」

独り得意気に呟いたところで携帯電話が歌い始める。

「杉下ですが……あ、はい!今すぐこつ

フローリングの廊下を滑つて、靴を履き、慌てて玄関を飛び出す……

…。

ああ、タイミングが良すぎたのだ……。
この日、俺は初めて鍵をかけ忘れた。

勢いよくサラリーマン風の男が飛び出して來た。

余りにもタイミングが良過ぎて、一瞬ギョッとしたが……慌てる必要は無かつた。そいつはこっちには田もくれずに駅の方へと走つて行つたからだ。鍵もかけずに……。

男は電柱の側に自転車を止めると、素早く屋内に忍び込む。シンと静まり帰つた家の中……人の気配は感じられない。

全く運の悪い奴だ。偶然にしちてもなあ。ちょろいもんだ。

酒の飲み過ぎで赤らんだ頬を緩め、男は室内を物色し始めた。

さんざんギャンブルに金を使つたこの男は、先程までは……それでも、ただの一般市民と言つてよい身分だった。

幾ら借金にまみれているからって、泥棒はさすがにしないだろうと、彼自身も思つていた。だが……。

『ふん、まあよ？ 鍵開けたままにしてくれなんなり……考えち
まうかもしれないけどよ』

そう毒づいた矢先に、それが起つた。

これは天の思し召しに違いない。

切羽つまつた彼は、犯罪者になる決意をした。

「へへへ、冷蔵庫のモンもかっぱりつくかな」

印鑑と通帳と微々たる金を手にした男は、薄ら笑いを浮かべながらリビングに隣接しているキッチンへと向かう。

「おお、中々」

大きな冷蔵庫の内は、食材の宝庫だった。
まつさらな卵の列に、牛乳・ビール・フルーツジュース、丁寧に並べられたタッパにはキムチや漬物が入っている。ラップのはつてある魚やらスパゲティーやらも、わんさがある。

あいつ、本当に独り暮らしかあ？

ビールとグラタンを引っ張り出した男のアルコール漬けの脳を、一抹の不安が掠める。

まさか……。

「あれ、かずちやん今日は早いのねえ……」

若い女の声に、男はガタリと振り返った。

食器棚にぶつかった衝撃で、がちゃりがけりつと皿が落ちては碎け散る。

薄汚れた赤ら顔を青くする男を見た若い女は、みるみる恐怖に顔を歪めていく……。

「わいわい……」

若い女は、歯を震わせて今にも叫びださんばかりに皿を見開いている。

まづこまづこ、なんとかしねえと……なんとかなんとかなんとか、

なんとか……。

ギラリと皿の端で包丁が光った。

男は乱暴にそれを掴むと、一心不乱に若い女へと突き立てた。

女のうめき声が消え失せるまで静かに、しつかりと突き刺し続けた。

やがて頬に飛び散った血液が乾いた頃……男は、はっと我に返りべたべたする包丁を投げ出した。

血まみれのTシャツを冷や汗が濡らす。

「う、嘘だろ……」

目の前の光景に涙ぐみながら後ずさる。

首を激しく左右に振り、何度も何度もそれを繰り返している。

その内……壁に行く手を阻まれた男は、ずるずるとくたりこみ笑い出した。

「殺す気は……なかつたんだ……」

いつもと変わらない、平和な夕暮れ時……。いつもよりも早く帰宅した俺を迎えたのは、パトカーの不可解に回る赤いライトだった。

几帳面に、数台止まつた白と黒のパトカーにざわめく人垣……黄色いテープで区切られた向こうは、我が家の中だ。

なんだ？ これ……。

ドサッと鞄の落ちる音を聞きながらも、拾う気にはなれなかつた。

頭がぼんやりして、どうやって立つていればいいのか……段々わからなくなつていく。

フラフラ足下がおぼつかなくなる俺の元に、紺の制服を着た警官が近寄つて来る。

「杉下さんですね？ 何度かお電話差し上げたのですが」

事務的なその声を遠くで聞いていると、自分のものとは思えない様なか細い声が俺の喉を震わせた。

「そうですか……今日はちょっと……電源切つてたもの、で」

責めた和也はそれ以上口を開かない。

そんな彼を一瞥するだけで警官は続ける。

「強盗殺人だと思うんですがね。犯人の気が触れてまして、落ち着くまでは何も聞き出せない状態です」

強盗、殺人？

口元を歪めて涙を溜める和也に、「では後程」と神妙な顔付きをして警官は去つて行つた。

「そんな……そんなっ」
胸の内を何かがのたうち回る様で、息が苦しい。

和也は地面に膝つき、拳を打ち付けた。

顔に血が上り、涙が目尻から溢れて止まらない。

どこかでカラスが呑気に鳴く。その首を締め殺してやりたいと思つた。

強盗殺人……。

「俺が……鍵、かけ忘れたから?」

和也は燃える様な夕映えの中で、いつまでも肩を震わせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0134f/>

その日、たまたま……

2010年10月20日07時48分発行